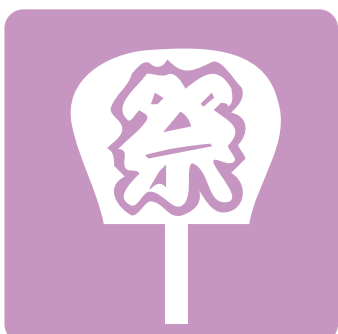
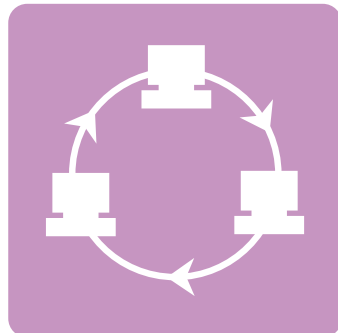


「いわむろのみらい」創生プロジェクト  
**コアコンセプトブック**



## はじめに

このコンセプトブックは、「いわむろのみらい」創生プロジェクトで展開される沢山のプロジェクトが全体で同じ方向を向いて活動するための核となる、「グランドコアコンセプト」を解説した本です。また、コンセプトを作るまでの考え方や手順、その中で見つけた岩室の色々な要素を順に掲載しています。

プロジェクトだけでなく、これからの「いわむろのみらい」を作っていく全ての活動の中での参考にしてもらえたらと思います。



# 目次

## —— コアコンセプトとは、その意義 ——

コアコンセプトのメカニズム .....	03
---------------------	----

## —— パートコンセプトができるまで ——

風景／景観 .....	06
風土／産物 .....	08
風体／生活 .....	10
風情／もてなし .....	12
風聞／催し .....	14

## —— コアコンセプト完成、その応用 ——

パートコンセプトの収束 .....	16
コアコンセプトの使い方 .....	17
プロジェクトマップ .....	18

## —— 資料 ——

資料前説 .....	20
風景の資料 .....	21
風土の資料 .....	28
風体・風情の資料 .....	30
風聞の資料 .....	31

# コアコンセプト形成の仕組み

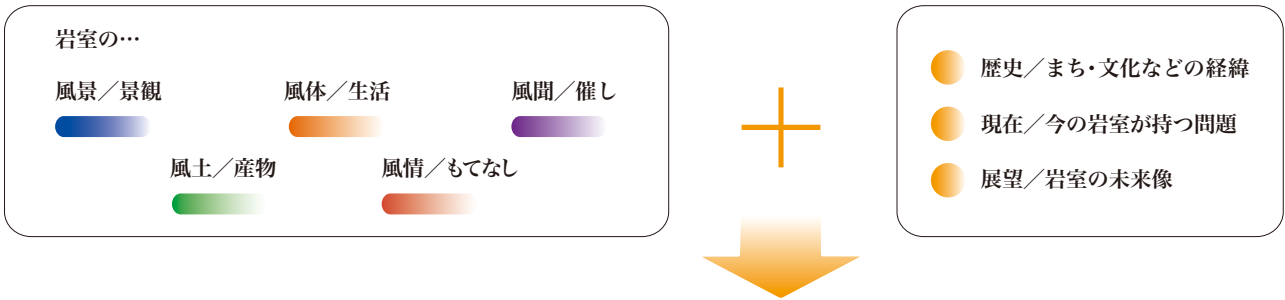
「岩室風」を求める、まちづくり5要素からの組み立て  
歴史・現在・展望からのプロセス

プロジェクトの指針となるコアコンセプトを考え始める上で、「岩室らしさとは何か？」を捉えなくてはなりません。最初のきっかけとして 岩室風 という言葉を手がかりにしました。岩室らしさをしっかりと表し、岩室の未来を見据え、風のようにどこまでも吹き抜け隅々まで行き渡るコアコンセプトを目指す事を決めました。

まず、岩室の持つ特性を明快に把握するために、「風」を頭文字とする、以下の 5つのカテゴリを展開しました。

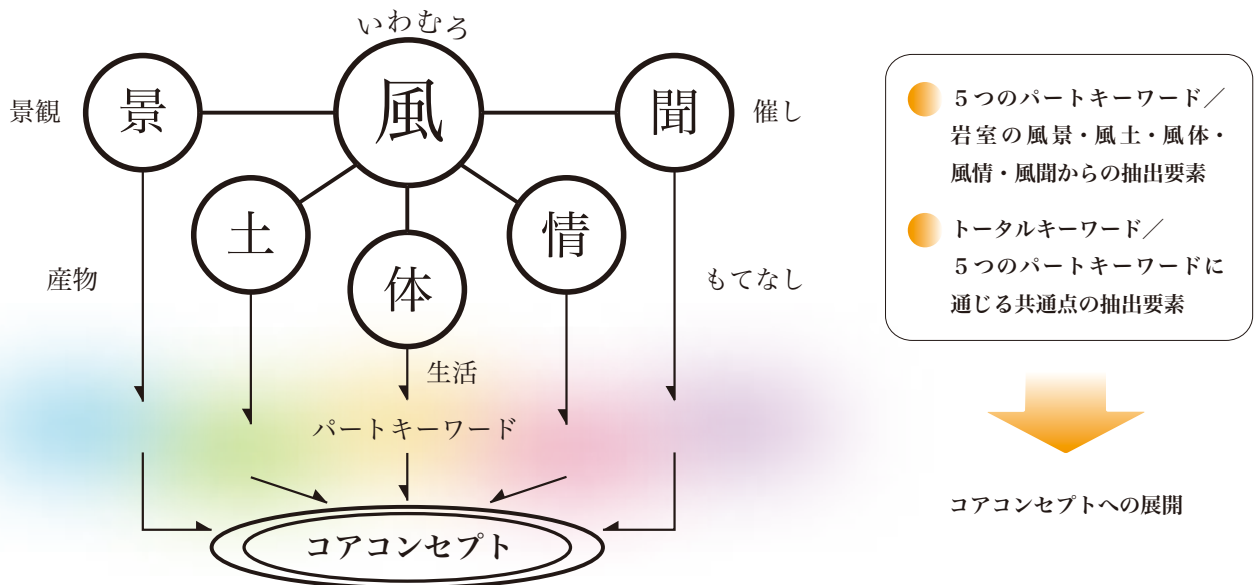
ここで重要になるのは、「それぞれのカテゴリから何を思いだせるか？」という事です。今ある岩室は、どんな歴史を経て、現在のかたちになったのでしょうか。また、これから先、どんな岩室になっていくべきなのでしょう。

そこで、各カテゴリの 歴史・現在・展望 を徹底的に考察し、あらゆる角度から岩室を探っていきました。



カテゴリごとの歴史・現在・展望の考察により集まった情報から、岩室の「らしさ」がどんどん見えてきます。ここから、「パートキーワード」を各カテゴリからひとつずつ抽出し、岩室をより明快に表せるかたちにします。5つのパートキーワードに共通する要素を見つけ出し、最後にひとつ、「トータルキーワード」を決定します。そこから、コアコンセプトを導きだしていきます。

コアコンセプト形成の全体図



## コアコンセプト形成の仕組み

コンセプトの設定「ほっ岩室」

5つのパートキーワードからの展開

5つのパートキーワードとそのテーマを設定し、そこに通じる共通点をトータルキーワードとして集約しました。このトータルキーワードが、コアコンセプトとして機能していきます。

各カテゴリーの5つのパートキーワードに、設定されたテーマ

風景／景観

### ほっとする里山

「里山」というコンパクトなスケール感と、それを囲む自然環境を活かした景観づくり。

風土／産物

### ほっこり郷の味

岩室独自の食文化を無理無く現代の生活に取り入れることで、岩室の伝統を大切に作る心をつくる。

風体／生活

### ほんわか生活

地産地生、帰農やスローライフをバックアップし、岩室での「つくる」「暮らす」を推進する。

風情／もてなし

### 惚れる心くぼり

温泉・芸妓・旅館の三本柱を建て直し、華や粋を感じる「大人の為の岩室温泉」をつくっていく。

風聞／催し

### ホットな情報

情報発信の中心をつくることで、岩室内外へ積極的にイベントをアピールしていく。

ほっ  
岩室

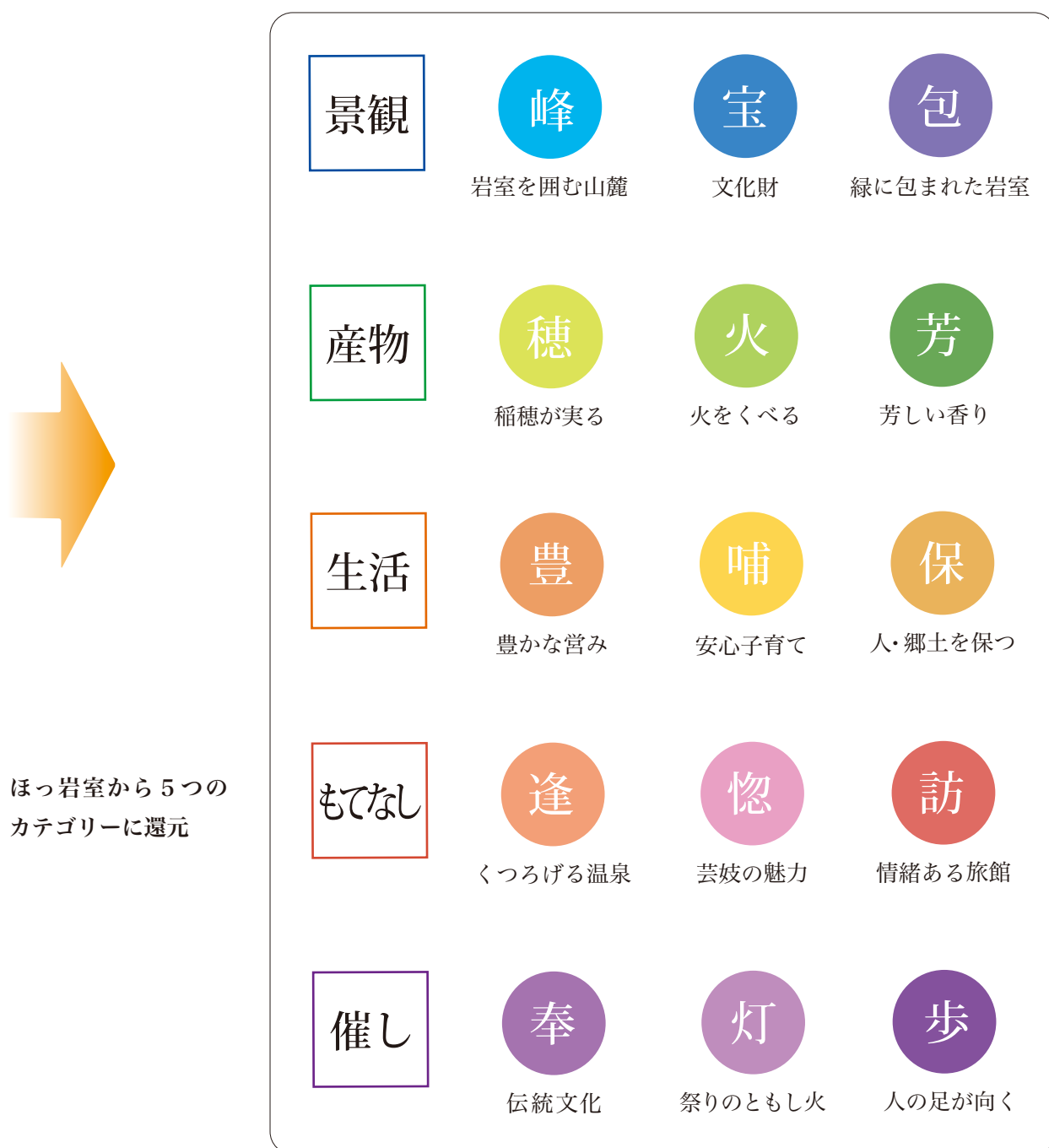
5つのパートキーワードから  
導きだしたトータルキーワード

## コアコンセプト形成の仕組み

「ほっ岩室」が描く岩室の未来像  
5要素への具体的波及

岩室の中にある様々な良さを見だし、「ほっ」を基にそれぞれのテーマごとに3つの漢字に変換しました。その漢字と岩室の持つ魅力とを重ね合わせて、岩室の未来を描いていきます。

歴史・現在・展望をふまえた、岩室のかたちをそれぞれ3つの漢字で表現



# 風景 景観

## 風景のパートコンセプト「ほっとする里山」とは？

岩室の景観を、その歴史・現在・展望と見つめて導かれたパートコンセプト「ほっとする里山」。ここではそれがどのような経緯を辿って出されたものかを紹介します。

### ①歴史のパートキーワード 『町場』

#### 自然

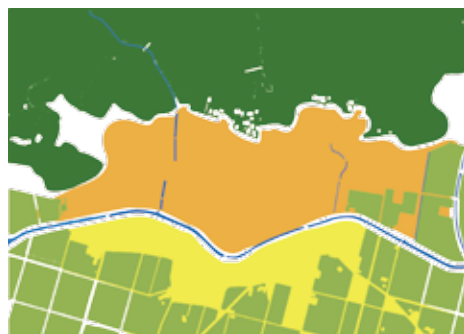
弥彦山・多宝山・天神山・松岳山・角田山…

- 山麓部と平野部の明快な空間構成。
- 「里山のまち」というスケール感。  
山岳信仰が根付く
- 温泉文化が始まる。(江戸時代中期 -1713年)

#### まちなみ

旅館が並び「もてなしの場」というテーマ下にある、活気づくまちなみ。

- 住人層の違いが作り出したまちなみ  
(1446年頃～)
- 林業が盛んだった(1966年頃～)  
➡ 広葉樹林が減少し、針葉樹林の増加。



▲岩室の地域分割



◀矢川橋からー 1930年(昭和10年)頃

里山に抱かれた岩室は、山麓部と平野部の明快な空間構成でそのこじんまりとした様子が「里山のまち」というスケール感を生み出し、そこに山岳信仰が根付きました。そして

江戸中期の開湯当時の住人層が作りだしたまちなみがキッカケとなり、もてなしの場という統一したテーマ下で『町場』的景観が形成されていきました。

### ②現在のパートキーワード 『錯雑』

#### 混在するまちなみ

自然景観・まちなみ共にまとまりが無く、せつかくの魅力ある景観も薄れている。

- 林業の衰退による影響  
➡ 植林された針葉樹の杉の放置。  
広葉樹が少なく、季節感が減少。
- 旅館・住宅・神社・寺・田んぼ・畑・店舗…  
様々な用途のものが混在している。

○ ➡ 生活が根付いたまちなみ  
どんな人々か？  
どんなライフスタイルか？  
感じとりやすい！

✕ ➡ 錯雑とさせている原因  
形式・色共に、統一感(まとまり)が無い。  
自然の景色を遮っている「視覚的騒音」。



▲現在の岩室の、土地と建物の分布図



▲現在の矢川橋からの風景



▲岩室の様子



現在のこの『錯雑』さは、コンパクトなまちの中に旅館・住宅・神社・寺・田畑・店舗など様々な用途の場所が混在しており、無遠慮に景観をさまたげる電柱や、低配慮のサインまたは

放置された杉林などに起因していると考えられます。岩室の風物の良さを殺しているこの状況を改善する意識と対策が今の岩室には必要なのです。

## ③展望のパートキーワード 『里山』

『里山』というコンパクトなスケール感と、それを囲む自然環境を活かした景観づくり。

### 通景軸の重要性

今後、景観を整備していく上で…

- 岩室のシンボルに対して「通景軸」をとる  
→ 調和あるまちなみが生まれる。

### 岩室八景

右の地図の8カ所から…

- 「近景・中景・遠景」を設定。  
→ その景色を中心に、景観を整備していく。
- 地図外にあるシンボル  
弥彦山・多宝山・天神山・角田山  
村の天然記念物の一本杉・はざぎ  
北國街道・良寛様にまつわる場所



▲新・岩室八景



▲岩室富士軸



▲富士山軸

場所に性質を設定したり名前をつけることは、その場所に対する住民の意識を高めることにつながります。松岳山や岩室神社に対して抜ける一直線の道を、通景軸として設定

することでその通りは同じルールの下で整備されていくし、現在いま一つの場所でも八景として定めることによって名が体を表せるように整備されていくのです。

## ①歴史・②現在・③展望をふまえて岩室が進むべき道…

## パートコンセプト 『ほっとする里山』

### 『ほっ』とする里山

#### 峰

岩室の地を形づくる山麓の景色  
弥彦・多宝・天神・松岳・角田…

- ex. やますその景観ルールづくり  
広葉樹林の再生  
矢川を魅力的に



▲矢川の護岸



▲玉川上水の護岸

#### 宝

岩室の文化遺産  
岩室神社・松岳寺・薬師堂・種月寺…

- ex. 「宝」を引き立てる色彩計画  
→ 道は、「宝」と「宝」をつなぐもの  
●道の整備



▲玉川上水の歩道と柵

#### 包

緑に包まれた岩室。  
山麓・下の堤・田んぼ…

- ex. 住宅地域の緑化  
→ 「包」の中に人を感じさせる  
●田畑もその魅力を活かす



▲杉に隠れた松岳山



▲奈良の畝傍山(うねびやま)

自然景観もまちなみ景観も過去を礎にして築かれる。里山を持つ岩室は過去の『町場』の景観が近代化と共に『錯雑』としたが、今後は里山を活かしていかなければいけない。

先に述べた考えで景観を整備していくことで自然の『峰』、人の『宝』、それらに『包』まれた『ほっ』とする里山になって欲しいです。



# 風土 産物

## 風土のパートコンセプト「ほっこり郷の味」とは？

岩室の産物を、その歴史・現在・展望と見つめて導かれたパートコンセプト「ほっこり郷の味」。ここではそれがどのような経緯を辿って出されたものかを紹介します。

### ①歴史のパートキーワード『旨い!』

#### 歴史をふりかえる

平野部(岩室、和納)→米作、そこから派生した酒造  
海岸部(間瀬)→漁業

しかし水害などで米の収穫は不安定  
漁業のみに収入源を頼るのも不安定

↓ 大正期の農業指導により…

他の野菜類の栽培が始まる(ex:枝豆、葡萄)

#### 近年の産業について

酪農業への参画

→現在農業粗生産額の三割を占める

地域ブランドの創出と強化

→「岩室せんべい」「宝山酒造」ほか旧西蒲原地域でのブランド多数

大豆栽培への取り組み

→大豆-醤油-味噌サイクルへの見込み



◀酒造の歴史は古い

今も昔も新潟といえば▶  
「米どころ」である



◀間瀬の魚は長く旅館での食事に供されてきた(写真はハタハタ)

平野部で米作、そしてそこから派生した酒蔵、海岸部で漁業。米、酒、魚…岩室という土地に根ざした生産物からは、土着的で濃厚な味わいの『旨い!』という言葉がその歴史を

ひも解くキーワードになってくるのではないのでしょうか。また酪農業、その機運が高まる地域ブランドへの着手、大豆栽培への動きなどが近年の特筆すべき動きだといえます。

### ②現在のパートキーワード『混在』

#### 岩室の今

問題点として挙げられるのは…

- ①旅館での食事に地元の野菜がのぼらない
- ②近代化したスタイルと伝統的スタイルの混在
- ③内外への“岩室ブランド”のPR不足

伝統的な温泉のある生活文化と近代化した様式が混在し、試行錯誤している状態にある

#### 今後どうするのか

それが喜ばれるからといっても、昔の里山の生活様式に戻す事はできない

↓ 近代化を続けるのか?

近代化と里山文化の保存をバランスよく行い、岩室のアイデンティティを確立する必要がある



◀ぎりあえは新潟空港の空弁で使用されている

地域でとれた野菜などを▶PRすることも必要



▲実り豊かな収穫前の畑(写真は夏井)

米どころに来たのに、食事がどこに行っても食べられるようなものしか出ない…。現在の岩室はその豊富な農業生産物があるにもかかわらずそれを上手く生かしていません。

対観光客だけでなく、自治体として未来を捉えた時重要になってくるのは、里山文化の保存と近代化のバランスを取り、岩室のアイデンティティを確立することにあります。

## ③展望のパートキーワード 『郷の味』

### 郷の”あじ”とは

岩室独自の文化を無理なく現代の生活に取り入れることで岩室の伝統を大切にする心をつくる  
→内へのPR

観光客に住民たちが岩室の魅力を発信していく  
→外へのPR



郷土性を強く打ち出した料理や安心な食材を提供することで「郷の味」(岩室の独自性)を強調



▲郷土性を強く打ち出した料理



▲小学校での芋掘り実習

ここで打ち出した『郷の味』を岩室の未来へとつなげていくために大切になってくるのは、岩室の風土における業者間(ヨコ)のつながりと世代間(タテ)のつながりです。

岩室のアイデンティティである『郷の味』を知って、広めてもらうためにはまず作る側、発信する側がそれを熟知し、誇りを持たなければいけないのです。

①歴史・②現在・③展望をふまえて岩室が進むべき道…

## パートコンセプト 『ほっこり郷の味』

育て、つくり、広める—

穂

穂が実る—  
岩室を大切に、誇りに思ふ気持ちを育てることで若い世代という”穂”を实らせる

→ ex:食育

火

火をくべる—  
岩室でとれた食材を火にくべて、住民たち自身が「岩室の食」をつくる  
→ ex:地元素材を使った創作料理の考案

芳

芳しいかおり—  
「岩室の食」を若い世代を含めた住民たちが外に発信し、「岩室の食」の芳しいかおりを辺りに漂わせる  
→ ex:観光客へ「郷の味」提供

芳  
火  
穂



◀食育の一環として地産地消給食を(長岡市三島町脇野町小学校の給食)

地元素材を使った新作料理を住民で考案した例(愛媛県の「レモン懐石」)



◀旅館でだされる料理の他にも「郷の味」を楽しめる施設や販売所の設置も考えられる(秋田県のきりたんぼ)



岩室の産物を、まずは皆で知ること。子供や若者に伝統や郷土料理を伝えることで、若い世代という『穂』を实らせる。次に、実らせた『穂』と一緒にかまどに『火』をくべて、

新しい岩室の産物を生み出していきます。そうしてできた岩室内での活動の輪は、『芳』しい香りとなって岩室の外へと広がっていくのです。

# 風体生活

## 風体のパートコンセプト「ほんわか生活」とは？

岩室の生活を、その歴史・現在・展望と見つめて導かれたパートコンセプト「ほんわか生活」。ここではそれがどのような経緯を辿って出されたものかを紹介します。

### ①歴史のパートキーワード 『内産内消』

#### 自然の恵みを生かし、地域でつくる

長い間、山や海など豊かな自然の恵みを生かした生活が営まれていた。→昭和初期まで自給自足に近い生活

昭和35年→人口10251人の内、農家人口は8097人。約8割。その中で、田植えやはざかけなど郷土の風景がみられた。

#### かつては子どもたちも多かった

昭和35年  
総人口に対する小中学生の割合は22,3%あった。  
平成16年、岩室の小中学生は959人。総人口に対し9,5%に。

なお減少傾向は続いている。  
総人口も緩やかだが減少傾向。

農業

林業

酪農

漁業



▲皆で田植えをしている様子



▲昔の学校風景

昭和初期までは自給自足的な生活がみられ、昭和の中頃まで大多数が農家人口でした。『内産内消』というキーワードが当てはまる、地域の恵みを活かし地域で営む暮らしです。

それが時代を追うごとに働き方、暮らし方が変わり、はざかけなど郷土の風景も見られなくなっていました。子どもの数も緩やかに少なくなっています。

### ②現在のパートキーワード 『外産外消』

#### 郊外解決型の生活へ

##### ▼働き方の変化

現在、農家人口→3割程度に減少  
第一次産業に従事→5%まで減少  
第二次、三次産業に従事→90%以上

地産の減少、自前の田畑では賅えない。  
地域でつくる→地域外から買ってくる

車時代の到来。  
車30分圏内が生活圏→郊外の大型スーパーへ

#### まちを出ていく若者たち

岩室に留まる若者が少なくなっている。  
平成2年、岩室に700人いた11～15歳の子ども。  
14年後、25～29歳の若者は520人(25%減)



▲ロードサイドの大型スーパー



▲若者が地域で働きたいと思える環境づくりが必要

現在は『外産外商』の言葉が示すように外へ働きに出て、外で作られたものを買うようになりました。地域の恵みを活かす第1次産業に従事する人がいない、車時代の到来が

到来が大きな原因だと考えられます。地域に留まる若者も少なく大きな問題です。地域で育った若者が留まり、いわゆる未来をつくりたいと思う仕組みが必要です。

## ③展望のパートキーワード 『地産地生』

### 地域で営み、地域に生きる

地産地生バックアップ  
岩室での「つくる」「暮らす」を推進する。

地域でつくられている産物を地域で買い、  
地域で消費していく仕組みをつくる。

また内外を問わず、岩室で暮らしたいとい  
う人々を受け入れる。帰農やスローライフを  
望む人々へのPRや定住促進。



▲ゆったりとした時間の流れる岩室。  
スローな魅力。

### 未来を担う子どもたち

子育てバックアップ  
岩室の未来を担うのは子どもたち。子育て  
しやすい環境を作っていくことで、子ども  
の減少をくい止める。



▲いわむるのみらいを担うのは子どもたち

岩室でつくり、生きるを推進する『地産地生』が展望のキ  
ーワード。地域の産物・仕事を生み出し地域で消費する仕組  
みが必要です。そして地域に根付く人を増やしていきます。

また風土が持つ魅力をPRし、岩室で暮らしたい人を積極  
的に受け入れていきます。同時に子育て環境づくりを進め、  
子どもの減少をくい止めていきます。

①歴史・②現在・③展望をふまえて岩室が進むべき道…

## パートコンセプト 『ほんわか生活』

### ほんわか生活

豊

豊かな営み  
岩室の自然の恵みを生かし、  
地域で「つくる」という豊かな  
営みを育てる。  
→ ex:地産地消、帰農斡旋

哺

安心子育て  
地域の未来である子どもたちを増やす  
ために、岩室で子育てがしたいと思  
うような環境をつくる。  
→ ex:保育園・幼稚園・託児所の充実  
子育てサロン開設

保

人・郷土を保つ  
人を保ち、郷土を保つこと。新潟市と  
なった今いかに岩室を保つか。地域で  
育った若者がまちに留まる魅力をつくる。  
→ ex:若者へのインタビュー  
就職場所の確保

豊  
保 哺



▲都市部で増えている帰農志望者に対  
して農業技術などを教える場所を設け、  
また定住希望者を受け入れていく。  
(鴨川市、ふるさと回帰・里山帰農塾)



子どもや高齢者にとって  
の足となるコミュニティ  
バス。地域をつなぐ役割  
も担う、車体は小さめで  
料金は100円程度(羽  
村 市コミュニティバス  
はむらん)

どんな暮らしを営んでいけるのか。暮らしは何よりも身近  
なことです。『内産内消』であった岩室の暮らしは次第に郊  
外解決型の『外産外消』へと移り変わりました。その中で

地域の恵みを活かす力が弱まり、若者を受け入れる力が弱  
まりつつあります。未来へ向けて『地産地生』を進め、地  
域と人が活かしあって暮らせる生活を目指します。

# 風情 もてなし

## 風情のパートコンセプト「惚れる心くぼり」とは？

岩室のもてなしを、その歴史・現在・展望と見つめて導かれたパートコンセプト「惚れる心くぼり」。ここではそれがどのような経緯を辿って出されたものかを紹介します。

### ①歴史のパートキーワード 『活気の時代』

#### 旅館・温泉・芸妓の三本柱

弥彦参りの精進落とし、湯治場として栄えてきた岩室温泉。旅館・温泉・芸妓が三本柱として岩室のもてなしの歴史を支えてきた。



時代が積み重なる中で、約1960年頃までは湯治、芸者遊びが岩室の目的の中心であった。

岩室温泉は、湯治という目的だけでなく弥彦神社参りの精進お年や芸妓遊びなどいわばおとな文化のまちとして栄えてきました。この地はおとなが楽しむ場所だったのです。

旅館・温泉・芸妓という3つの存在が、岩室を特徴付けてきたといえます。その他にも浜遊びの途中に立ち寄ったり、月見を楽しんだり、岩室温泉は賑わいを見せていました。

### ②現在のパートキーワード 『立ち消えたもの』

#### 時代の激変に巻き込まれ

1960年代以降、高度経済成長やバブル経済などによって日本全体が激変を開始する。



▲上越新幹線が都心からのアクセスを促した



▲関越自動車道による影響は大きい

上越新幹線の開通、関越自動車道の整備等アクセスの向上やマイカーの増加、大型バスによる団体客の受入れは岩室にも大きな変化をもたらす。

客層が変化し、それにつれ客の求めるものが変わっていった。

➡ 客の要求にただ応え続けるあまり、本来岩室を特徴づけていた文化がいつの間にか立ち消えてしまった。

1960年代以降日本が、そして人が急激に変わり始めました。岩室を訪れる客層が大きく変わり、それにともない客が求めるものも変わっていったのです。岩室でしか得られない

時間ではなく、即物的な充足を満たすことを求めるようになりました。そしていつしか岩室を特徴づけていた文化が立ち消えてしまったのです。

## ③展望のパートキーワード 『おとな心』

### 失われたおとな文化の再生

岩室温泉を支えてきた三本柱を建て直す。  
そしてかつての岩室に存在していたおとな文化  
を創造してきた『おとな心』を呼び覚まし、  
華や粋を感じる『おとなのための岩室温泉』  
を作っていく。

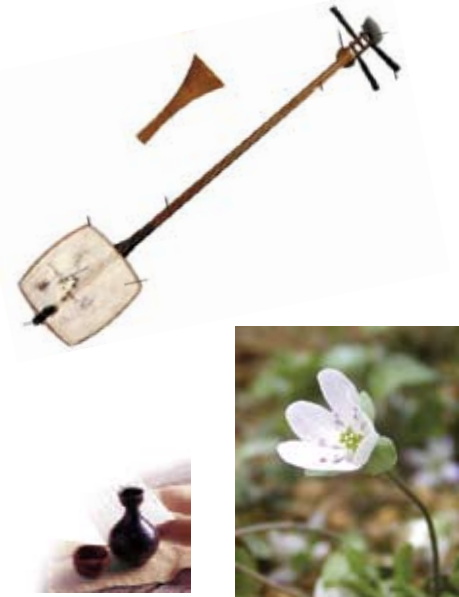
#### おとな心とは・・・？

人生の機微を感じる  
相手のことを 思い遣る  
味わいがある  
深みがある  
練られている  
ここで楽しむ  
旅情を感じる  
四季を感じる

#### おとなの岩室をつくる 具体的戦略(例)

季節を感じるインテリア  
風情を感じる湯船  
芸者遊びの敷居を低くした企画  
宣伝戦略強化  
ビニールでないスリッパ  
うるさい黄色のタオルを見直す

などなど



岩室温泉を特徴付けてきた文化。それは「おとな文化」です。  
それを創造してきた「おとな心」を今改めて呼び覚まします。  
時代・人間の変化に惑わされず、おとな心という将来像に

もとづいて岩室温泉を支えてきた三本柱＝旅館・温泉・芸  
妓を建て直し、華や粋を楽しめるおとなのための岩室温泉  
を作っていくのです。

①歴史・②現在・③展望をふまえて岩室が進むべき道…

## パートコンセプト 『惚れる心くぼり』

### おとな心のもてなし

訪

**旅館：情緒 -**  
旅館全体で岩室らしさや季節感を演出、  
情緒感じさせるもてなしをお客様に提供する。

- 困り込まず旅館同士で協働
- 岩室懐石などのオリジナル料理 等

逢

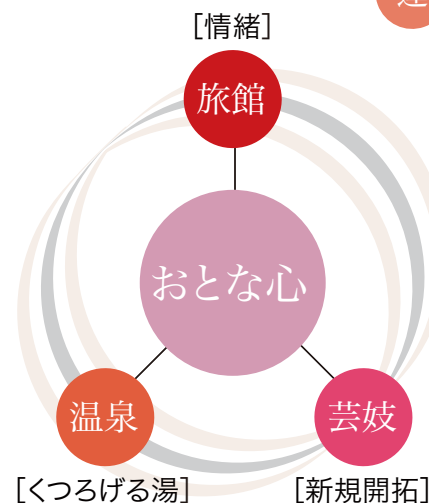
**温泉：くつろげる湯 -**  
お客様を思いやる気持ちで企画開発する。  
入浴の前後ももてなしの時間と考える。

- ・さりげなく溶け込むバリアフリー
- ・風情を感じさせる内装や設備 等

惚

**芸妓：新規開拓 -**  
芸妓の方々の魅力をお座敷の強化とともに、  
新しい方面へも展開させる。

- ・PRやWeb等の強化
- ・旅館での新プラン企画 等



おとな心のもてなしが  
岩室を風情へと導く。

「情緒ある旅館を訪れ、くつろげる温泉に出逢い、もてなし  
に惚れる。」新しく現代風にするのは簡単ですが、風情を演  
出し続ける事は容易な事ではありません。

岩室温泉を支えてきた三つの柱、それをおとな心というも  
のを軸に復活・連携・影響させ合うことで風情を生んでいく。  
おとな心のもてなしが岩室を風情へと導くのです。

# 風聞 催し

## 風聞のパートコンセプト「ホットな情報」とは？

岩室の催しを、その歴史・現在・展望と見つめて導かれたパートコンセプト「ホットな情報」。ここではそれがどのような経緯を辿って出されたものかを紹介します。

### ①歴史のパートキーワード 『様々な地域』

#### 昭和35年から現在へ

幾度の合併により  
特色ある地域を  
内包する岩室。

それぞれの地域で  
伝統文化を  
大切にしている。

文化保存会や  
青年会などの  
地元団体の活動も盛ん。  
(清掃活動、発表会、  
スポーツイベントなど)

地域活動をベースに  
様々な行事、お祭りなどが  
各地域で催されている。



▲夏井のはざかけ体験ツアー



▲岩室産業祭り



▲よりなれ春の舞



▲岩室温泉まつり



▲越後七浦観音例大祭



▲和納十五夜まつり



▲和納十五夜まつりの草花火

現在の岩室市は多くの地域を内包しています。芸妓さんを抱える温泉街をもつ岩室、美しい海に面し越後七浦観音像のある間瀬、古い逸話を多く持つ和納、はざかけの景色が

素晴らしい夏井など、個性あふれる地域ばかりです。またそれぞれの場所で多彩な催し物が行われており、地域活性化の基盤はしっかりと作られています。

### ②現在のパートキーワード 『バラバラ』

#### 個別・分散

- 地元に貢献する活動は盛ん。
- しかし気軽に外部からでも参加できるイベントが実は結構少ないのではないだろうか。あったとしても知り得にくい。
- 交通手段が少ない  
アクセスをどうしたら良いか解りにくい。
- イベントが開催されるのは個別の場所のイメージが強い。もっと岩室全体で統一感が欲しい。

情報の統一を！

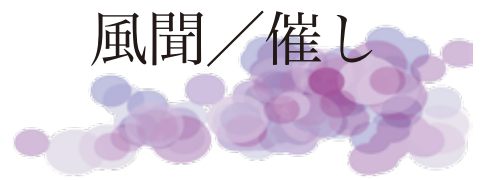
イベントがありすぎてどこへ行ったらいいんだろう？  
どこにいったらすぐに情報が手に入るんだろう？  
どうやって目的のところまで行ったらいいんだろう？



岩室の各イベントが同じ岩室内のものと言う統一感も薄い…

現在の岩室を言葉に表すなら、「バラバラ」です。その理由の一つとして情報の統一がされていない事が挙げられます。外部地域の人や観光客に向けた情報を総括する情報ツールが

必要だと感じました。もう一点はアクセス方法です。岩室内は散策するにはいささか範囲が広く、気軽に利用できるような交通手段が必要です。



③展望のパートキーワード 『情報の統一と展開』

情報の中心を設ける

より岩室の催し物をしてもらい  
イベントを活性化につなげよう  
まうは情報を総括しよう、そして発信しよう

「いつ」「どこで」「どんな」「どうやって」  
外からの人でもすぐわかるように

情報の中心が生まれることで、  
中から外へ、外から中へ文化を取り込んで  
新しい取り組みにも挑戦しやすく。



岩室の催し物に対する展望は「情報の統一」です。催し物の情報発信を統一することにより、すばやく正確に伝わり、岩室のイベントや文化をより知ってもらえると思います。

もう一つが「アクセスの充実」。例えばバスや路面電車など気軽に街の中を回れるような移動手段があれば、地域活性化にも繋がるのではないのでしょうか。

①歴史・②現在・③展望をふまえて岩室が進むべき道…

パートコンセプト 『ホットな情報』



『ホット』に広がる

**奉** 奉る一尊敬の気持ち  
岩室に伝わる古くからの伝統文化  
催しを尊敬する心を忘れずに、  
そして新しい力にも目を向けて  
➔ 神社／伝統文化／昔からの催し物

**歩** 歩いて、歩んで  
イベントに足が向きますように  
岩室をたくさんあるいてまわって。  
未来に向かって一歩一歩  
➔ 岩室の中で人のうごきを活発に

**灯** 祭りの灯  
イベントをもっと活気づけよう、  
人も集まる、文化の交流が盛んに  
岩室に祭りの灯が点る  
➔ 岩室中が催し物盛んに活性化していきますように



岩室には古くから根付いた伝統があります。その伝統を基盤にした催し物により、人と人の交流の機会が増える岩室を作ります。「奉」は尊敬を意味します。昔からあるものを

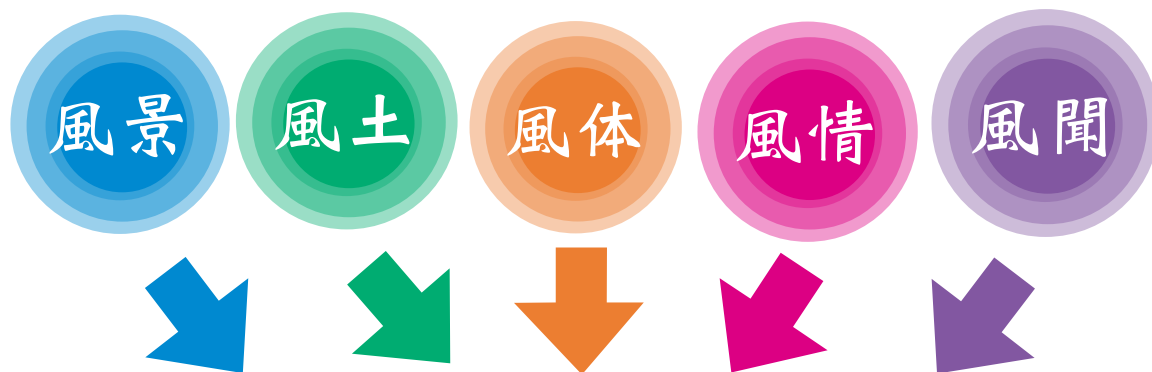
大切にしその上で新しいことに挑戦します。「歩」は人の交流、未来への過程をイメージしています。そして岩室全体に「灯」が点る、活気あるホットな場所を目指していきます。



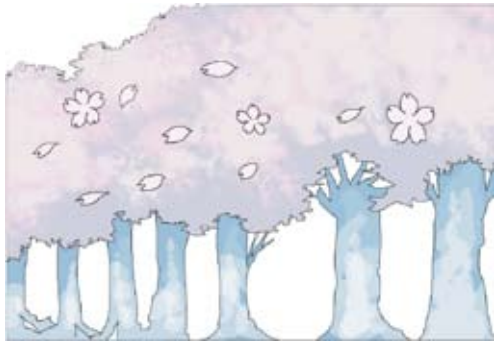
# プロジェクトマップ

ここでは、各学科プロジェクトが、それぞれ関わりの深そうな5つの風のカテゴリの近くに配置されていますが、実際にプロジェクトを行っていくにあたって、関連する範囲は一つにとどまらず複数にまたがってに広がることでしょう。

いわむろの未来プロジェクトではどんな計画が風景／風土／風体／風情／風聞のどこに位置づけられていくのでしょうか。  
わたしたちはそのことをきちんと見つめながらプロジェクトに取り組んでいくのです。



ほつ  
岩室

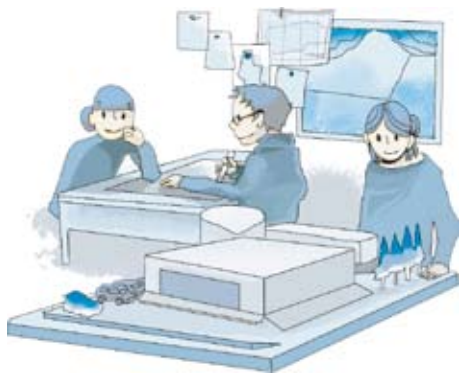


▲道の計画



▲公園計画

# 風景



▲観光複合施設計画



▲ストリートファニチャー計画



▲サイン計画

# 風体



▼照明計画



▼サウンドスケープ計画



▼商品開発・工芸品・グッズ



▼ワークショップ計画・実行



▲商品開発・食品



▲観光デザイン



▲展示会デザイン計画・実行

# 風情



▲いわむろ新聞



▲キャラクター開発



▲アートサイト岩室温泉2007

▼マーク・ロゴタイプ計画



# 風聞

## 資料前説

コアコンセプトをつくるにあたり、私たちは当初未来のことばかりを考えていました。岩室をあんなふうな街にしたい、こんな観光地にしたい…そうして思いつくままキャッチフレーズを並べ立て、そこからコンセプトを立てようとしていたのです。

しかし、行き詰まりました。私たちが未来ばかりを見つめてつくったコンセプトはどれもがキャッチフレーズに後付けされたものでしかなく、まちづくりの指針となれるような芯に欠けていたのです。

まちの歴史なくしてまちは成り立たない。それを無視してつくられたまちは、どこかテーマパークのようで人の温かさや情緒といったものに欠けます。私たちは未来のことばかりに固執しすぎていたのです。

そうして私たちは、岩室の過去を調べることにしました。岩室の方に提供して頂いた資料を片っ端から読み、数字のデータに隠されたまちの歴史を読み解いていきました。そこには、つくりものでない、人の息づかいが感じられる「岩室の歴史」がありました。

資料を読み、把握し、その事実を考えていく中で、自然とコンセプトは浮かんできました。資料を読むことで、私たちははじめて岩室という土地を知り、その未来を考えることができたのです。

資料はデータでしかないのかもしれませんが、私たちにとってはこのデータはそのままコアコンセプトの一部でもあるのです。この資料があつてこそコアコンセプトは補完されます。だからこそ、『コアコンセプトブック』たるこのブックに資料ページを入れました。この資料が皆様のコアコンセプトへの共感に役買って下されば幸いです。

## 1. 風景の添付資料（2）



歴史		自然
1917	富岡に県道が開通。	
1921	電灯が各戸に1～2個普及。電柱も、この頃に建ち始めたと思われる。	
1922	越後鉄道の、西吉田～燕間が開通。	
1925	岩室村で合資会社イワム口自動車を発足。	
1926	※交通の便は、だんだんと良くなってきている。	県下観光地コンクールで 間瀬村が海岸美で第1位に。 この時点で、矢川は 現在の形をなしている。 水害が多かった為、 人工的に形を変えている。 ゆるやかなカーブを無くし、 角度をつけて 水流の勢いを緩めている。
1933		
1939	「岩室神明神社」が「岩室神社」へ改称。	
1945	第2次世界大戦。	
1953	終戦。※この間、戦時体制の為に、旅館業は禁止されていた。	
1950	『新越後物語（改題：岩室情話）』を公開。 温泉街は、砂利道。	
1955	弥彦が国定公園に指定される。 岩室と間瀬が合併。 ※この頃までに、パチンコ屋さんが1軒あり数年間営業 していた。芸妓の数は50人程。	
1956		
1958	ブロック塀が普及し始める。 旅館はみな割烹で日帰り宴会が主だった。道路事情の変化に伴い主に県内からの 客が増える。弥彦神社参りと、派手な芸者遊びが主だった。車が増えてくる。	
1961		
1963	岩室村初の道路舗装工事が行われる。	
1964	岩室、弥彦、観音寺が国民保養温泉地区に指定される。 第1期投資時代（鉄筋コンクリート化など）。	
1965	土日の祭りの為、道路で渋滞が発生しはじめる。 温泉街を（地蔵のところまで）アスファルト舗装にする。	
1966	車が増え始め、車社会の本格的な始まりとなる。 岩室温泉集中加熱事業開始。（外部介入を伴う短期間で行う改築） 新国道116号が完成する。 ※この頃、岩室の温泉街は、身近な湯治・遊興の場から、外に向けた誘客へと 雰囲気を変え始める。国民保養温泉地に指定されたことによるものか。	
1970	弥彦山スカイライン開通。客層が県内外にへと広域化。「岩室ドライブイン」開業。	
1971	岩室はスカイライン建設関係者の遊び場としても栄える。	林業 (広葉樹林の伐採と植林) 杉林が広がり始める。
1973	増改築し、大型化する旅館が出始める。	
1974	岩室駅が無人駅となる。 シーサイドライン開通。旅館の鉄筋コンクリート化が進む。	



次のページへ続きます

## 1. 風景の添付資料 (3)



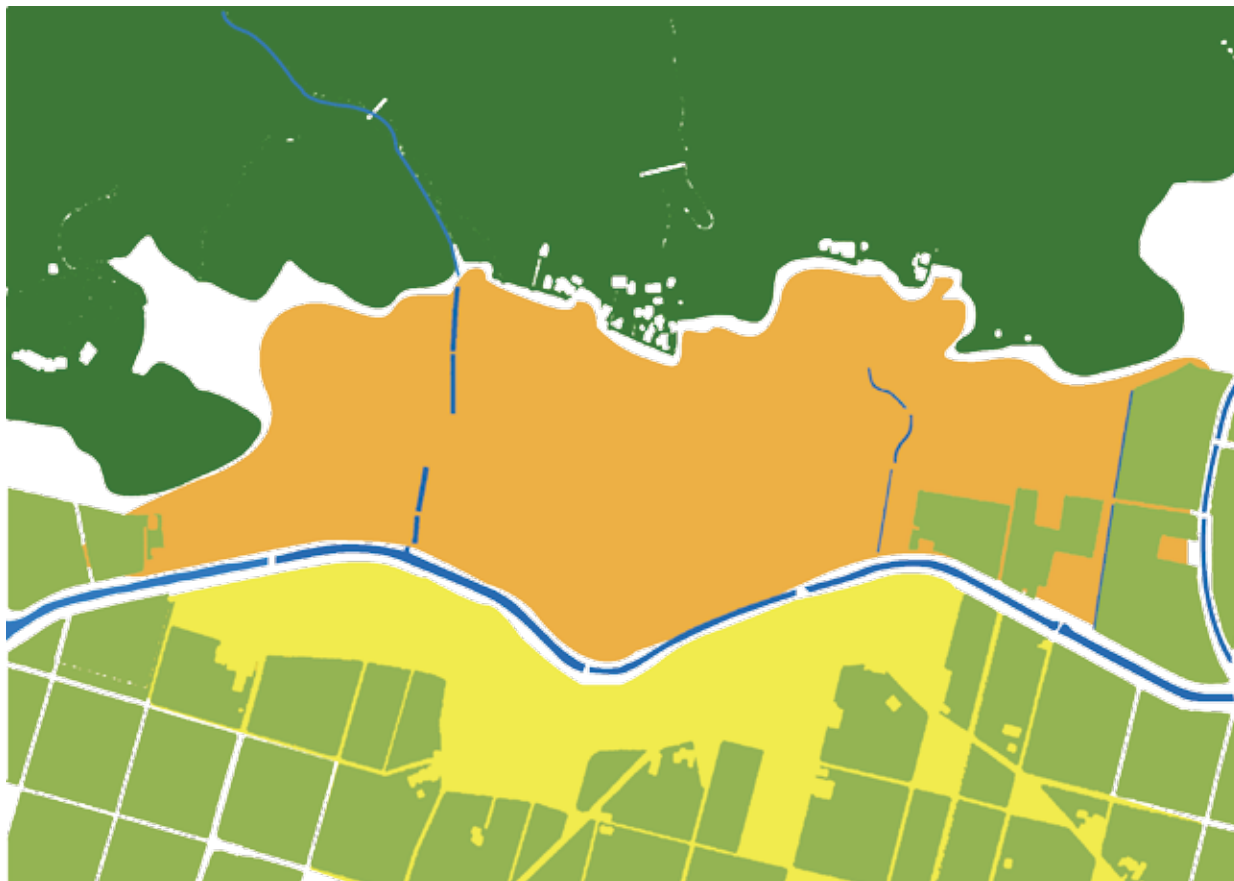
歴史	自然
1976 弥彦・寺泊バイパス(例のメインストリート)が全線開通。	
1981 「岩室ドライブイン」取り壊し。	
1982 丸小山野外緑地広場が完成。 上越新幹線開通。 弥彦の大鳥居完成。	
1985 関越道全線開通。	
1986 種月寺が県指定重要文化財になる。	
1989 国指定重要文化財になる。	
1990 岩室村は都市計画区域に指定される。 石瀬の浄専寺庭園が県文化財に指定される。 マイカーの来訪者が増える。 ※ ここ数年(おそらく)の岩室では、旅館の設備投資に力を入れている。	
1995 岩室温泉新源泉掘削開始。	
2005 平成の大合併により新潟市となる。	






## 1. 風景添付資料(4)

### 風景／歴史の補足

以下の図は、2006年12月22日に武蔵野美術大学で行われた、立花ゼミ公園計画チームの発表で使用した地図を元に、作成したものです。

岩室を形づくる地形の分布と、開湯当時から江戸後期にかけての住民層の違いを表したものです。



- |   |  |  |   |
|---|--|--|---|
|  | 山麓部<br>弥彦山・多宝山から北へ角田山まで、岩室をなめらかに囲んでいる。 |  | 矢川から西側（山麓部側）のエリア。<br>江戸時代中期頃から、庶民的で、賑やかなまちなみを展開させていた区域。 |
|  | 平野部（田んぼ）<br>越後平野へと続く。                  |  | 矢川の東側（平野部側）のエリア。<br>大きな田畑を所有する庄屋など、裕福な住民が住んだ区域。         |
|  | 川（矢川と権吉川）                              |  |   |











## 1. 風景添付資料(5)

風景／現在の補足

以下の図は、2006年12月22日に武蔵野美術大学で行われた、立花ゼミ公園計画チームの発表で使用した地図を元に、作成したものです。

現在の岩室の中にある要所を分布して、配置関係を表したものです。略している部分があります。



	山麓部 応用樹林が減り、針葉樹の放置が 問題。		旅館
	平野部（田んぼ）		寺
	畑 矢川に沿っている。		神社
	川 (矢川と権吉川)		その他の建物 (住宅・店舗・病院などを含む)

## 1. 風景添付資料(6)

風景／展望の補足

以下の図は、2006年12月22日に武蔵野美術大学で行われた、立花ゼミ公園計画チームの発表で使用した地図を元に、作成したものです。

『いわむろのみらい計画書』の中で提案されている「岩室八景」を新しく設定しました。岩室の拠点に対して通計軸をとることで、街の景観を整備するという意識を提案しました。各拠点のまわりに、建物、道、木々がどんな見え方に入ってくるかを検討しようというものです。



●地図外にある重要な拠点（シンボル）

弥彦山・多宝山・天神山・角田・はざぎ・村の天然記念物の一本杉・丸小山公園周辺 など

●近景・中景・遠景の設定

●通計軸の確保と、それに対する景観の整備。



### 富士山軸

「通計軸」の例として、富士の絵を挙げた。

●富士の威厳、人々が持つ山への信仰心が象徴された、まっすぐに伸びる道。

●そしてそれに沿い、整ったまちなみ。



### 岩室富士軸

昭和10年の岩室。

●松岳山に対して、橋から道…山までの景観が明快に通っている。

## 1. 風景の添付資料（7）

現在の岩室から、  
景観を抽出



矢川橋から見る矢川



杉に隠れた松岳山

改善イメージと  
しての事例



東京・玉川上水の歩道と柵



東京・玉川上水の護岸



奈良の畝傍山(うねびやま)

### 参考資料のまとめ：

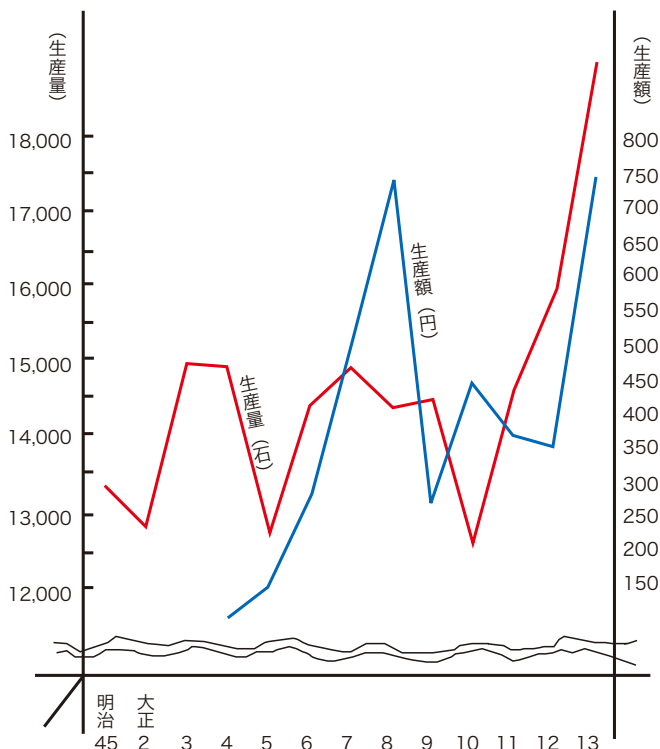
「新潟県やさしい観光のまち推進調査報告書（案）」

「岩室村史」「いわむろの記憶」

## 2. 風土／歴史の添付資料（1）

漁具	漁法	水揚げ高			
		明治以前	明治年間		
<p>○化学繊維使用は昭和二五年以降、かに、えび網に一部使用している程度（性能が良い点は認められるが高価だったため）</p> <p>○麻より綿になったのは大正二三年の改良長網（イワシ網）の使用から、釣り針機械製使用も同じ</p> <p>網網共麻糸、各自手製 釣り針、釣金各自手製</p> <p>網、網共綿糸、手製または機械製 釣り針、機械製</p>	<p>○漁法は昔から余り変化なく延縄、刺網、一本釣りなどで、時代が進むにつれて大規模になった。</p> <p>○キス釣りの職業化は大正年間</p> <p>○小型動船の曳釣は昭和二十年後、底曳禁止は二十八年から</p> <p>○月別魚種 一月…タラ、ヒラメ、たこ 二月…同上 三月…同上 四月…イワシ、マス、タイ 五月…タラ、サバ、かに 六月…サバ 七月…サバ、いか、かに、えび 八月…いか、かに、えび、キス 九月…サバ、シヤケ 十月…同上 十一月…タラ 十二月…ハタハタ、たこ</p> <p>○魚種と餌 イワシ…スズキ、クロダイ、あぶらめ、フゲ イワシ…サバ、タラ、のどくる えだこ…タイ</p>	四七、六〇〇円	三七、六七二円		
		年間大船（七人）九人乗り）丸木舟（二、三人乗り）少々	冬季だけ大船（十六人乗り）丸木舟（三、四人乗り）	同上	動方船（八人）十三人乗り）丸木舟（三人）四人乗り）
		同上	同上	同上	同上
		同上	同上	同上	同上
		同上	同上	同上	同上
		同上	同上	同上	同上
		同上	同上	同上	同上

■間瀬の漁業概要（大正期 - 昭和 20 年頃まで） / （出典：岩室村史）



■岩室村における米の生産高の推移（M45-T13） / （出典：岩室村史）

※罾×粕は罾の加工品  
 ※1石=米 1000合=約=180.39ℓ  
 1貫=6.25斤=3.750kg  
 1斤=600g  
 ※1円=現在の 2000円程度  
 （あくまで目安）

## 2. 風土／歴史の添付資料 (2)

作物年	米	大麦	小麦	大豆	小豆	菜種
明治 45	13,669 石	688 石	1,397 石	1,452 石	98 石	57 石
大正 2	13,073 石	613 石	1,288 石	1,385 石	10 石	113 石
// 3	15,096 石	332 石	754 石	251 石	80 石	68 石
// 4	15,034 石 173,492 円	385 石 1,743 円	779 石 7,011 円	1,537 石 14,601 円	172 石 1,720 円	188 石 1,504 円
// 5	13,028 石 189,752 円	869 石 4,345 円	744 石 6,344 円	1,535 石 14,955 円	315 石 4,725 円	
// 6	14,573 石 306,033 円	478 石 2,629 円	875 石 12,250 円	1,379 石 20,685 円	182 石 3,640 円	115 石 1,610 円
// 7	15,027 石 495,891 円	503 石 2,917 円	786 石 11,790 円	1,420 石 28,400 円	126 石 1,613 円	111 石 2,220 円
// 8	14,637 石 687,939 円	563 石 4,786 円	826 石 17,870 円	1,548 石 38,700 円	177 石 4,248 円	
// 9	14,688 石 286,416 円					
// 10	12,922 石 442,709 円					
// 11	14,894 石 371,072 円	450 石 3,600 円	1,515 石 24,990 円	1,412 石 25,416 円	160 石 3,366 円	
// 12	16,024 石 368,552 円					
// 13	18,648 石 693,773 円	642 石 5,136 円	574 石 5,136 円	1,714 石 34,280 円	178 石 5,340 円	512 石 8,740 円

■岩室の主要農産物生産高（大正期） / （出典：岩室村史）

品名	数量	価格
魚介	143,534 貫	55,277 円
魚油	570 石 800	856 円 200
鰯×粕	6,208 石 750	10,418 円 200
銅	25.752 斤	11,073 円 360
石材		6,683 円 000
杉		373 円 000
松		50 円 000
竹材		1,332 円 870
薪		500 円 000
萱（かや）		185 円 800
箒（ほうき）	500 本	25 円 00
さつまいも	3,600 貫 000	216 円 000
ごぼう	700 貫 000	210 円 000
かぼちゃ	1,000 貫 000	50 円 000
ごま	400 貫 000	60 円 000
計		87,310 円 930

■間瀬村生産移出額（大正期） / （出典：岩室村史）

※鰯×粕は鰯の加工品  
 ※1 石=米 1000 合=約=180.39 ㍓  
 1 貫=6.25 斤=3.750kg  
 1 斤=600g  
 ※1 円=現在の 2000 円程度  
 (あくまで目安)

### 3. 風体／現在の添付資料(1)

■近年における岩室村区域の人口増減

平成7年	平成12年	平成17年
10140	10042(平成7年比▼1%)	9759(平成12年比▼2.8%)

(国勢調査より)

■平成12年度 岩室村区域における産業別平均年齢

全産業	農業	漁業	サービス業
45.2歳(5022人)	60.4歳(359人)	62.0歳(41人)	43.4歳(1402人)

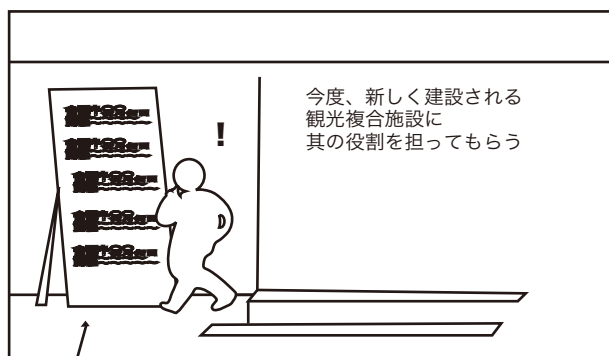
(国勢調査より)

### 4. 風情／歴史～現在の添付資料(1)

年代	入込客数	概要
古代		弥彦神社創建
1713年		岩室温泉開湯
1831年		弥彦詣り、浜遊びの途中、秋の松岳山の観月、春の矢川の花筏観賞の際に岩室温泉が来客でにぎわう。 この頃から1965年あたりまで岩室温泉は弥彦詣りの精進落とし、女性によるもてなしの場だった。
1960年	約30万人	新潟市や県外からの宿泊客は芸者遊びが主。
1962年	約18万人	
1963年	約20万人	岩室温泉、弥彦・観音寺とともに国民保養温泉地区に指定。 菊祭り、初詣、七五三で渋滞が発生し始める。
1964年	約26万人	湯治客減少／大型観光バスでの来訪増加 新潟地震発生。
※1965年～1970年		いざなぎ景気
1965年	約30万人	車が増え始める／温泉街アスファルト舗装
1966年	約32万人	温泉の雰囲気の変り始め(身近な湯治場、遊興の場から外に向けた誘客へ) 新国道116号完成
1970年	約29万人	弥彦山スカイライン開通。建設工事関係者が多く訪れる。また開通により客層が広域化。／いざなぎ景気終了
1971年	約33万人	このあたりまで燕の洋食器業者の接待の場として栄える。 増改築し大型化する旅館が出始める。客による旅館の棲み分け
1973年	約41万人	第一次オイルショック発生
1975年	約52万人	越後七浦有料道路(シーサイドライン)開通 女性客、家族客、県外客、5名以下のグループの割合が増加。
1977年	約92万人	最盛期
1978年	約105万人	
		第二次オイルショック発生
1979年	約48万人	
1982年		上越新幹線(大宮～新潟間開業)
1985年	約64万人	上越新幹線(上野～新潟間開業)／関越自動車道開通 広域からの観光客が増え始める。首都圏からのフリー客が増加。 ※1965年以降このあたりまで観光と飲食を存分に忙しく楽しむ客が多い
※1986年～1990年		バブル経済
1986年	約69万人	客層の個人化、グループ化が始まる
1988年	約67万人	宿泊客の7～8割が県外客
1989年	約67万人	マイカーで訪れる客が増える
1990年	約74万人	
1991年	約52万人	バブル崩壊 遊興・歓楽中心の地元客減少 大型旅館内での客の活動が完結し、旅館外の飲食店などの数が減少。 客室収容力30名以下の旅館の経営が厳しくなり始める。
1993年	約40万人	
1994年	約46万人	大型バスでの来訪が減り始める。 熟年夫婦や連泊客が増え始める。 増改築時に道路からセットバックする旅館が出始める
1995年	約44万人	
1996年	約56万人	
2000年	約51万人	

## 5. 風聞／催しの添付資料

### ① 現地のイベント総合施設アイディアスケッチ



こういった、当日ごとのイベント一括インフォメーションパネルの設置 立て看板でなくても形態を工夫する。

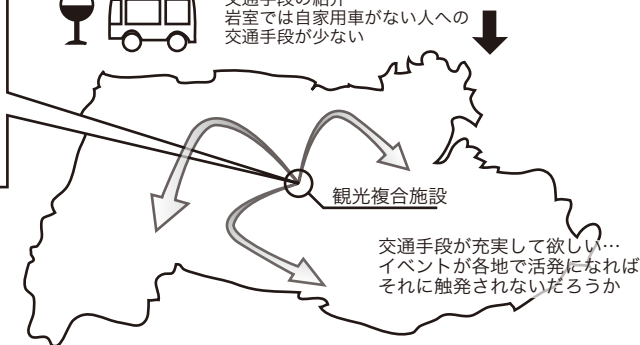
外からきた人、地元の人 どちらも問わず すぐにイベントの情報を知り 現地に向かいやすくなる。

イベントカレンダー 観光複合施設を覗いて すぐにどこかに行くことができる ポータル施設へ  
 イベント開催場所  
 イベント日時

アクセスマップ 交通手段の充実を。



交通手段の紹介 岩室では自家用車がない人への 交通手段が少ない



### ② イベントのためのサイン計画の充実



岩室全体でイベントに 統一感を出すため インフォメーションを表す 共通のサイン計画を行う。 (ピクトグラムのデザインなど)

### ③ ポータルサイトとの連携



オンラインでもいつでもチェックできるように 観光複合施設の情報をポータルサイトとリンクする。

※以上メンバー自作のアイディアスケッチ

「いわむろのみらい」創生プロジェクト

## コアコンセプトブック

---

2007年6月24日発行

---

監修 宮島慎吾  
プロジェクトチーム代表

---

編集 プロジェクトチーム / コアグループ  
赤松慎太郎 伊井洋貴 川田誠  
小林つぶら 櫻井奈穂 高橋里佳  
三好怜美 村井祥平 和田瑛里

---

発行 武蔵野美術大学

現代 GP 「いわむろのみらい」  
創生プロジェクトチーム



「いわむろのみらい」創生プロジェクト